



八木慎一 新連載

編集部の大谷先生と千葉先生とご縁があり、今号からマガジンに投稿させていただきます。立命館の先端総合学術研究科で院生をしていたことがあり、当時から対人援助学や先生方は存じ上げていました。ただ当時は深いつながりはなかったのですが、人生どこでどう巡り合いが回ってくるのかわからないものですね。再び出会えたことに感謝です。大学院にいた時は、アクセル・ホネットの社会哲学の研究をしていました。修士の2年間研究して、文献研究だけを続けていくのは自分には向いていないと感じました。その頃、姉が子どもを産み、その子どもを抱っこした時に、可愛すぎて、「そういえば俺、子どもすっごい好きやった！」と思い出し、保育士になりました。初めての職場は保育園。そこから今回の連載のテーマとなる「農福連携」の就労支援まで、現場仕事では14年が経ちます。なまじ研究をやってきたからでしょうか、どうしても現場の実践に対して、違和感を覚えやすい体質です。今回の連載で、書くことを通して、自分自身の対人援助に関する考え方を整理していきたいと考えています。お付き合いいただけますと幸いです。

対人援助のジレンマのありか
P294～

シルバーマン恵子 新連載

この号から連載を始めますシルバーマン恵子と申します。締切日になんとか短い原稿を提出したところ「短信もお願いします」とお返事をいただき「あ！短信！！」と改めてゆっくりと短信を拝読しました。お仕事や暮らしの気配が伝わってきて、ほんわかすると共に「マガジンに連載してみたら？」というご提案をいただき、ホイホイと喜んで飛び込みましたが「大丈夫だろうか？私??」と改めて緊張を感じながらこの短信を書いています。

高校を卒業した後、フェミニズムや市民的不服従への興味から米国留学。心理学か社会学か悩みつつ、社会学を専攻しました。帰国後は企業や在外公館でビジネス分野での二国間の橋渡しの仕事に関わりました。魂が引っ張られるような感じでハワイ島に引っ越したのが20年前。ハワイ島の先生たちからネイティブ文化や癒しの技術を学びはじめました。受け取ったものを今度は伝えていくという「責任」も受け取っていたことに気づき「全ての命とその関係性を尊重する」在り方をどのようにして日々、生きていくか？を探求する中でNVC(非暴力コミュニケーション)に出会いました。

自分がいま、何を感じていて、何が大切、あるいは必要なのか？に気づきを向けるシンプルな実践がベースのNVCが、自分を大切にすること、周りの人たち、そしてその先に広がるたくさんの命を大切にすることの第一歩であることを体験しています。既存の社会の規範や常識と、NVCが提唱する人間観/世界観や「みんなのニーズが大切にされる世界」というビジョンの間の橋渡しに、いま、関わっているのかな？と感じています。そんなところから、対人援助に関わる私たちをサポートするスキルや視点の1つとしてNVCやその実践からの経験を共有していけたらなと願っています。記事へのフィードバックも大歓迎です。お仲間に加えていただけることに大きな喜びを感じています。どうぞよろしく願いいたします。

対人援助のためのNVC
P292～

八木 明恵

プロ野球の監督が暴行で逮捕された背景に、子どもが生成AIに相談したことがきっかけでつながったという報道に触れました。人ではなく、まずAIに相談する。そうしたことが、すでに現実の中で起こり始めているのだと感じました。



(イラスト、chatGPT)

別の場面でも、カウンセリングを学ぶ学生が、日常的に生成AIに人生相談をしているという話を読みました。私の身近でも、子どもが自分の進路についてChatGPTに相談していたことがあります。親として、福祉職として、そして生成AIの活用を伝える立場として、簡単に「そんなものに頼ってはいけない」とは言えない自分がいます。

生成AIは、問いを受け止め、整理し、言葉を返す力が驚くほど高い。一方で、時にもっともらしい嘘をつきます。そして、出した回答に責任を負ってくれるわけでもありません。

AIが出力する一般論で判断し行動することで、社会の側も動いていくという現実を、対人援助の領域でも見つける必要があるのだと思います。便利さの先に何が起こるのか。私自身も、まだ答えを持たないまま、その問いの前に立っています。

思考の補助線
P288～

田中 千晶

院生時代は片道2時間ほどかけて通学していました。『遠くから大変じゃない?』と聞かれた際には「新快速で1時間かからないので!」「寝てたら着くので!」とへらへら返答していました。しかし、考えてみると家から駅までの運転、電車の乗り継ぎ、バスに乗り換え…とろもろ含めるととんでもない長旅だったような…。

4月からは通勤時間は車で40分ほどに。朝の時間にゆとりがあることの幸せを噛みしめています。5時50分に起きて7時18分の電車に乗っていた日々が考えられません。

9時30分出勤、バンザイ＼(^o^)/

森で出会えば・・・

P286～

本林 友梨

毎日バタバタと過ぎていく。

仕事を終え、子どもの迎えに向かう途中、信号待ちの車の中で「今日も終わった…」と一息つく。ふと空を見上げる。高い建物のない田舎の夕方、まだ少し青みの残る空が一面に広がっている。最近、空を見上げるたびに、「ああ、私はここで生きていくんだ」と思う。一年前には、こんなふうには思わなかった。

田舎で暮らすことには、良いこともあるし、不便なこともある。生活においても、心理臨床の実践においても。それでも、その両方を引き受けながら、ここでやっていこうと思えるようになったのだと思う。

心理臨床における多重関係を考える

P281～

馬渡 徳子

今年のGWには、能登の伝統的な祭りや行事が、地元や移住者、関係人口といわれる人々の力で復活した。本マガジンの執筆者でもある高名さんの地元七尾市でも、青柏祭という曳山行事が催され、ふるさとでゆったりとGWを過ごされた方々も多かったようだ。

「山車曳く吾子 仰ぎしは天空のじいじ」

馬渡徳子



日本医療ソーシャルワーカー協会は、過去の大災害支援の経験を活かし、能登半

島地震の際には1・5次避難所での移行支援と最北の珠洲市に拠点(専従職員配置)をつくり支援活動を今年3月末まで継続くださった。石川県医療ソーシャルワーカー協会は地元のソーシャルワーカー・介護支援専門員・相談支援専門員さんと継続した支援活動を行ってきた。ふるさとの伝統的な行事や学校行事にも参画してきた。

「風薫る 五月の空を仰ぎけり」高浜虚子



団士郎氏の家族の漫画展・トークショー 2025年度はコープいしかわ能登半島地震支援活動助成金を基に12か所6自治体にて開催した。石川県介護支援専門員協会能登北部支部・能登中部支部・認定NPO法人おやこの広場あさがお・日本福祉大学石川県地域同窓会に共催いただき、感動や様々な化学反応に遭遇した。

母校の先輩(日本福祉大学石川県地域同窓会の能登地区役員)が、会場にて職業病だとあきらめていた病を劇的な快復に導いた施術師に10年ぶりに再会されたのだ。この方の配偶者さんが地元において長年地域づくりに貢献してこられた方で、二年前から輪島での活動をご一緒いただいております。初回輪島と最終回輪島が実現していた。先輩は地方公務員を定年退職後は、地元で民生児童委員・人権擁護委員として活動されておられる。三人でのお話ぶりを直ぐ近くで拝見し、とても胸が熱くなった。

以下は、本事業の責任者を務めた寺本紀子さんの言霊(事業報告書より抜粋)である。「この事業によって多くの被災者、中でも被災者でありながら支援者として仕事をしている人達に対して、団士郎氏の漫画とトークを通じて、さまざまな家族の物語を届けることができ、今を乗り越える力、未来を見通す力を提供できたのではないかと思います。『何も問題が起こらない家族はない』という前提を確認しつつ、あまりにも大きな問題を抱えることになった被災者に

も普遍的な家族の見立てに役に立つことを実証できたのではないかと思います。劇的な変化が起こるわけではないが、ゆっくりとじわじわと前に進む力を与えてくれた取組だったと総括したい。」

漫画展とトークショーは、2027年2月には輪島市において三回目の開催が決まっている。

「再会のマジック 社会に

春を呼ぶ人間の力」馬渡徳子



馬渡の眼

P132～

山岸 若菜

私は本を読むのが好きなのですが、悩みとして分厚い本が寝転んだ状態で読みにくいということがありました。

仰向けで顔の上に本を広げて読んでいると腕が疲れてくるし、分厚い本になるとちょっと持ち損ねると顔に本が降ってきて痛い。

両肘をついてプランクみたいな姿勢で読んでいると肘も腰も痛くなる。

ならば横向きはどうかというと私は右向きが好きなので本の序盤はいい感じでもページが進んでいくにつれ読み終わったほうが分厚くなってきて持ちにくいし、持ち損ねた時には本が閉じてしまうのでどこまで読んだかわからなくなる。

そもそも寝転んで読むのをやめろやか、持ち損ねすぎちゃうかとかいうツッコミは無視して、ついに電子書籍を購入してみました。

なんと言っても薄いし、小さい字を大きくできるというのもいい。

すごく快適なのですが、本を買った時のように著者を応援している実感が得られないのが少し残念だなあと感じ始めました。

本を読むのは私にとってちょっとした推し活なんだなと思います。

ある訪問看護師のあたまの中 P272～

乾 京子

4月に廃車にしてから、生活が一変しております。歩く、歩く、歩く。バスや電車の時間を調べる。少し早い目に家を出る。今までのぎりぎりに行動するから、なんとも待つことが多くなり、一日に外向きにできることも、あれもこれもではなく、一日ひとつ、一日一か所という具合になってきました。ある意味、年相応になってきたのかもしれませんが。しかし、坂道がこたえる～！！下りが特に膝関節症にはきついです。まっ、もう少しでこの生活にもだんだんに慣れ、自分の身体との折り合いもついていくことでしょ。

今日は、友人に誘ってもらって、比叡山麓、四が谷をハイキング。目的のクリンソウやイワタバコの花には遅かったり早かったりでしたが、タニウツギ、コゴメウツギ、ツクバネウツギ、ウノハナ、モチツツジ、そしてふわふわと優しい薄紫のコアジサイにたくさん出会えてラッキーでした。

じゃりんこ文庫 P278～

中谷 陽輔

年度が開け、コソダテにおける余裕を作り難い社会構造について書きながら、引き続き自分のインフラとしての「余裕」を見つめ直しています。…ただインフラになっているものって、失ってこそ、その大切さに気付くってありますよね。

最高気温が 30℃を超えるようになった5月のある日、我が家の冷蔵庫が壊れてしまいました。修理に来てもらうまでの数日間、冷蔵庫に氷を入れるという「いつの時代やねん」な日々を過ごす中で、色んなインフラがあって日常が成り立っている有難みを改めて感じていました。

喉元を過ぎれば忘れてしまうような気もしますが、不満ばかり言っているのもしんどいですし、たまには今あるインフラに目を向け、大切に、感謝をもって過ごせるように…なんて今は思っています。

日々のちょっとした余裕でも、有難いと思える自分でありたいものです。

コソダテノシンリ P252～

団 士郎

こしばらく、『ナラティヴ』の事が気に入って続けている。世間に大きな影響を与え、時には物事の結果も逆転させてしまう物語・ストーリーである。

以前から関心は持っていたが、最近また意識化するようになったのは文部科学省から打診のあった『地域における家庭教育支援の充実に向けた研究会』参加を決めたことだった。(2026年3月から半年あまり、主にzoomで八人の委員で文科省のスタッフと部内会議を継続する)

ずっと言ってきたことだが、今世間に繰り広げられる子育て物語(ナラティヴ)は症状、問題、事件に偏りすぎている。当然のことだがニュースになるのはそちらばかり。子育てのネガティブキャンペーンだ。そして非婚化、少子化が加速する社会がある。

私に言わせれば当然で、もっと普通のありきたりの家族の豊かな日常物語の伝搬も必要だ。そんな思いも込めた発信が『木陰の物語』の連載で、27年目になった。



そこに問題意識があり、具体的実践を長く続けてきたつもりだから、それを活用できる可能性があるなら、文科省の探る家庭教育の今後の議論の場に参加してもいいかと思った。

文科省の事業として「木陰の物語」はなかなか難しいと思うが、もう上手くいきそうにないなら止めておくのが得策と考える歳でもない。どのレベルのプレゼンになって消えてしまうかは分からないが、多少の使命感を持ってできることはしておこうと思った。なにしろ私の残り時間はそう多くはないのだから。

そんな風に思っている割には、気ままな日常(中味は「晩年 DAN 通信」)に終始していると云われそうだが。

晩年D・A・N通信 P37～

内田 一樹

最近のキーワードは記憶とアート。何かについての記憶。何かを表現する技法、生み出されたものとしてのアート。この2つが最近の私の中での問題意識やキーワードです。中学校・高校の教員として新しい1年が始まりつつ、毎年同じ内容についての授業を行う中でふとした瞬間に過去の記憶を思い出すことがある。同時に劇的な変化は少なくとも少しずつ授業をつくっていつているが、これもまた技法としてのアートなのかもしれない。

社会科の授業を 対人援助学の視点から P262～

宮井 研治

孫2号は、無敵です。孫1号のエピソードは短信でずいぶん取り上げてきました。その興味の対象は、「重機」からスタートし、車類一般を経由しながら、「恐竜」そして戦隊モノに行くかと思わせておいて、今や「ウルトラマン」の専門家として確固たる地位を築いています。4歳にして、独力でひらがな・カタカナの読みを習得し、ウルトラ大辞典なるものを隅から隅まで読み込んでいます(漢字はまだ守備範囲には入ってはいませんが、大丈夫です、大辞典の漢字にはきっちりルビがふられていますから)

この兄にして、どんな妹なのか。興味の対象は、お人形、ママごとと道具？たしかに興味を示してはいますが、彼女の興味は多岐に渡ります。まず、兄である孫1号がその対象でした。とにかく、同じことをやりたがる。同じ方向へ行きたがる。兄大好きなのですね。そして、彼女の1番の特徴は、とにかく自分でやってみないと、触ってみたいと納得しないことです。兄の場合は、なんとなく騙しがきくといいますが、「これぐらいにしたろか」という感じで、諦めてくれる場面がみられたような。彼女の場合は、とにかく、やってみたいこと、触ってみたい物には、トライさせないと後には引かないつこさがあります。知らないもの、納得いかないことに対しては、「なに(何)、な

に、なに？」と説明を求めてきます。他にも、兄はチャイルドシートに乗るや否や寝落ちするのに、妹は基本縛りつけられることは嫌、機嫌をとるのがたいへん。兄はお昼寝もして、夜もよく寝ていましたが、妹は睡眠時間が短く、ちょっとした物音でも起きてしまう、それでも人一倍元気に遊んでいるという感じでしょうか。

人には個人差があるなんて、自明のことと普段は片付けてしまいましたが、ほんとはあるんですね。だからこそ面白いと言うと、パパママには、白い目で見られるジイジなのでした。

人生は対応のヴァリエーション

P274～

櫻井 育子

震災から15年、そして教員を辞めて10年。そして5月に引越しをした。というのも、わたしは震災後、一家(と言っても母と叔父)3人で終わってしまう家族である。見事なまでに親戚と疎遠な我が家は、土地に根ざすことなくわたしの都合により5年単位で引越しをしている。今回はわたしとパートナーと暮らす家の隣に、母と叔父も引越し。見事に全員の苗字が異なるが、借りた家はそもそも1軒だった家を二つに分けたために住所上は同居のように見える。こんなバラバラの名前を見たら、こりゃシェアハウスか何か？と思うに違いない。そして苗字って一体なんだ。実はわたしも母も離婚後に、旧姓に戻っていないからこんなにバラバラ。戻さなかった理由は「手続きが面倒だから」である。法律ってなんだろう。結婚ってなんだろう。もはや疑問しかないのだ。だからこの先もパートナーとの暮らしも籍を入れる、のようなことはしないだろう。説明の難しい家になってしまっているにも関わらず、不動産屋さんも大家さんも、高齢だがとてもおおらか。ますます堂々と生きようと思った2026年の5月。

生涯発達支援塾 TANE 代表

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

現象学としての書道

P250～

鳴海 明敏

備忘録

県庁職員を定年退職した翌月、2010年平成22年4月に新規開設された児童心理治療施設青森おおぞら学園の園長を引き受けて、15年間勤めました。

2024年令和6年秋に軽い脳梗塞で入院し、それを機に、翌2025年令和7年3月で園長職を退き、現在は、法人の理事長として、週に3日学園に顔を出すという生活をしています。

理事長として、週三日5時間ずつ出勤する生活も一年を経過しました。ようやく、「三日出かけて四日在宅」というペースに慣れ、奥さんとの家事の分担の折り合いもついてきたかなあというところ です。

月一のペースで開催している「フォーカシングの会」と、同じくらいのペースでウェブで開催している「(カウンセリング関係)文献を読む会」への参加が楽しみです。

理事長の独り言

P248～

畑中 美穂

藍を、種を蒔くところから育て始めた。藍染の染料になることは知られるが食べることもできるそうで、先日はかいわれ大根のような藍を椀に入れ、おすましにして食べた人が写真を見せてくれた。一方私は、「水のやりすぎ？」「やらなさすぎ？」、陽に「あてるべき？」「あたりすぎ？」とはらはらして過保護気味！ そうなることは予測していたが、ある意味、子育てよりも難しいかも。



「ほお～。かあさん、俺たちのこともそんなに大事に育ててくれたんか？」と我が子たちの恨み節も聞こえてきそうである。今はまだポットに入っているのだから、「早く定植して大地の力に委ねたい…」と思いつつ、やがてくるその日までは床に這いつくばって愛でる日々を楽しみたい。

次号あたりでもしも無事にこの藍たちが何らかの作品になることができましたらご披露します(*^-^*)

一語一絵

P217～

渡辺 修宏

「春を満喫・・・と思っていたらやたらと暑い。そういえば今年は、スーパーエルニーニョ現象になる可能性があるらしい。

暑い、というより、怖い。いろいろな種類の汗がでる。」

対人援助実践をリポートする

この一冊

P220～

玉村 文

2026年度、長男がついに小学生になりました。先輩ママたちから散々聞かされていた「小1ギャップ」、いったいどんな洗礼を受けるのかとドキドキしながら4月を迎えました。

給食が始まるまでの20日間は毎日お弁当。入学グッズの買い出しに、持ち物セットの確認……と、始まる前は「これが大変そう」と思っていたのです。が、実際に蓋を開けてみると、いちばんハラハラしたのは登下校でした。

通学路ではないところを歩いて迷子になり、近所の方に保護される。雨の日、ちゃんと傘をさしているのになぜか濡れで帰ってくる。登校班があつて助かっているものの、毎日「無事に着いたかな」「帰ってくるかな」と気が気じゃない1ヶ月でした。

幸いお友達もできて、本人は学校が楽しい様子。学童にはちょっと怖い3年生がいるらしいけど、なんとかやっています。担任の先生には「学校に来られているだけで花丸。1年かけて慣れていけば大丈夫ですよ」と言っていたが、「そんなものか」と少し肩の力が抜けました。

1年後、このハラハラは落ち着いているのかしら。慣れていないのは、子どもより親の方かもしれません。

応援 母ちゃん

P205~

杉江 太郎

児童福祉界隈で働く杉江と言います。人事異動により、カフェドゥスギエの太客が別の職場に異動となり、売り上げに大きな損害を与えることになりました。人事異動は良くも悪くも人の生活を変えてしまいます。今でも一杯 60 円で商売を継続中。細々と管理をしています。職場内では、年に数回、自身の持っている書籍(ほぼ積読)を一覧にして、いつでも貸し出せるよう、皆に紹介しています。一覧を作成し始めたのは、過去に同じ本を 3 度続けて買ってしまい、これではダメだと、持っている本を管理できるようにしようと思ったのがきっかけです。エクセルに打ち込んで、適当にキーワードなど入れて、羅列しただけなので、どんな本かのイメージも沸き難く、貸し出しを希望される方は少ないのですが、それでも希望をして下さる方はおり、返却の際、お菓子を頂くこともあります。ちなみに名前はブックドゥスギエです。イメージは本の読めるカフェ。そんなことをしながら繋がりを模索する毎日を過ごしています。

「余地」-相談業務を楽しむ方法-

P193~

米津 達也

「挑め、己の限界に」このキャッチコピーが5月の比叡山になびいた。毎年、この時期に開催される比叡山トレイルランニングレース。久々のコンペティションの世界に胸が躍り、そして打ちのめされた。他者の中にいることで自身の存在価値がわかる。費やしてきた努力の時間と距離。生命は限りある。それを燃やし尽くせるか、自分の限界を知りたくて走り続ける中年ランナーに乾杯!

川下の風景

P212~

川畑 隆

新連載 70の手習い

めいきんぐ「横書き都々逸①」

べつに“隙間恐怖”があるわけではないのですが、「私の頭の中のまだエンピツ」のファイナル後すぐに、新しい連載を始めることにしました。たぶん連載になると思うのですが、“試運転”を①として載せてもらいます。

相変わらずですが、「どこどこ行った」報告です。5月下旬の土日は、そだちと臨床研究会の8名の仲間に、関東・関西から4名のゲストを迎えて総勢12名の伊豆長岡一泊旅行でした。



往きは途中で吉原から岳南電車に乗りました。まず吉原本町で降りて、お肉屋さんで買ったコロケとメンチカツを近くの公園で缶ビールとともにいただきました。美味!! 岳南電車は昔は製紙工場の紙、今は人を運んでいて富士山を見せてくれるので有名なのですが、曇っていてその景色は拝めませんでした。

宿泊はホテルニュー八景園、ここも富士山が見えるのが売りですが、「あそこに見えるはず」という想像を働かせるしかありませんでした。でも「天空のおふる」は最高!! 料理もおいしくいただき、6時からの一次会に続く二次会が終わったのは11時頃。みんなよく喋りました。

翌日は修善寺散策。初めて行きましたが、よいところですね。人もそんなに多くなくて、のんびりブラブラできました。お蕎麦も美味でした。

新連載 横書き都々逸

P203~

浅田 英輔

本文でも触れていますが、青森県庁を退職し、独立いたしました。「カウンセリグオフィスあおもり」という名前で行って

ます。届けを出したりするのはもちろんですが、Googleに登録したり、支払い方法を決めたり、オフィス内のシステムを整えたり。イチからとなると、やること多いもんですな——。ご予約はこちらから。

<https://co-aomori.net/>

臨床のきれはし

P100~

松村 奈奈子

今年の春の旅は、鵜飼のシーズン始まったばかりの長良川に。鵜飼は日本のいくつかの川で行われているのですが、長良川の鵜飼いは一番古く1300年以上続き、取れた鮎は皇室に献上されるとかで、鵜匠さんは非常勤の国家公務員扱いだとか。いやー、屋形船からの伝統の鵜飼いの見学、楽しかったです。鵜が捕った鮎を鵜匠さんに見せてもらったのですが、鮎のお腹のあたりには、鵜がクチバシでつまんだキズ跡がついています。それが、鵜飼でとれた鮎の証だそうです。

川岸からは岐阜城が見えて、かの織田信長も鵜飼で要人の接待をしたとか。鮎を食べながら、歴史をじわっとかみしめました。

神科医の思うこと

P128~

村本 邦子

「東日本・家族応援プロジェクト」を終え、今年度は12月のシンポで15年の振り返りを行う。今年からは、「福島フィールドワーク」として、学部生と大学院生と共に福島沿岸部のフィールドワークを続ける。この連載も2024年度の記録まで追いついてきたので、少しペースを落とそうかな~と思う。月末のこの3日、文化人類学会で水俣・福岡に来ている。せっくなので水俣の写真を入れたいなと思い、最後まで引っ張って、帰りの新幹線から提出する。文化人類学会では、multi-sited ethnography ということと福島についての問題意識からプエルトリコのエネルギー自立について発表した。これからこのテーマを追っていく。ちなみに、我が家は100%再

エネ、ペランダに太陽光発電を導入した（ペランダでの発電はなかなか厳しいが・・・）。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P115～

國友 万裕

新学期の授業が始まりました。

僕は最初の授業で、まずは学生たちに前置きをすることにしています。

「僕はもうお爺さんだから、皆さんたちは年が離れ過ぎていて、あなたたちの考えていることがよくわからないんです。授業を楽しみたいから、皆さんに話を振ることもあるのですが、僕が何気なく悪気もなく言ったことで、不快になったりすることもあるかもしれないです。故意に嫌なことを言うことは絶対にしないつもりですが、人それぞれ受け取り方は違って来るし、言われたくないこと、言われると嫌なことは違ってきます。

僕は、前に有名な女性のカウンセラーの先生のカウンセリングを受けていたのですが、彼女に相談した時も、『私たちカウンセラーだって、相手を全然傷つけずに仕事をするなんてことはできないですよ。まして、学校の先生なんかは誰一人傷つけずに仕事していくなんて、絶対にできないです』と言われたこともあるんですよ。だから不快になることもあるかもしれないけれど、ある程度は仕方がないわけだから、その点は理解してください。

」

今は先生と言う仕事は本当に難しいです。僕たちが若い頃は、先生が絶対の時代だったから生徒の自尊心を傷つけるようなことを平気でいう先生はゴロゴロいて、今だったら昔の先生たちは首だと思いません。

だけど今は、先生の方は学生を傷つけてはならないと厳しく言われるのに、学生の方は先生に対して失礼なことを平気で言ってきます。これまで学生からトラウマになるようなことを言われたことは何回もあります。

昭和の頃とは、考え方が 180 度変わっているのです。僕たちの頃は、先生がどれだけ酷いことを言おうが、「それが私の教育方針なんだ」と言ってしまうはずで

いたのです。

ところが今は先生の方は本当に悪気もなく言ったことであっても、学生の方が悪く解釈してしまったり、その時点でハラスメントになってしまう。また、授業中に A さんという子に話をふったとして、A さん自身は別にそのことをなんとも感じていなくても、そのやりとりを見ていた B さんが不快だと感じてしまったり、ハラスメントになってしまうのです。

これは先生と限ったことではないでしょう。昔は故意に相手を傷つけるようなことを言っても、「私は悪気はなかったんだ」と言ってしまう逃げることができたのです。とりわけ 1980 年代は、どれだけ嫌なこと、相手を傷つけることを言っても、「ジョーク、ジョーク」と言ってしまうと、逃げることができると思っている奴が多かった。私は冗談のつもりで言っているのに、そのことで傷つくのはあなたの捉え方が問題であると相手に責任転嫁することができたのです。

本当に昭和は馬鹿の時代。人の心というものを全然考えていなかったんですよ。今みたいに優しい時代になったのはある面良かったけれど、あまりにも配慮過剰にしないでならないから、身がもたなくなることがあります。

でも、そう言いながらも、学生に慕ってもらえる、構ってもらえるとすごく嬉しいです。他の仕事だったら若い子と接することなんてそうそうできない。僕は毎日それができる。先生の役得です。そのせいか、僕はまだまだ精神年齢は 20 代です。



(イラスト、chatGPT)

スポーツおじいさんになりたい！

P87～

三浦 恵子

家族療法を積極的に導入していた児童相談所で大学時代実習をさせていただいて以降、本マガジン編集長の団先生のもとでの学びを続けています。学会や研修はオンラインあるいはハイブリット開催が

全盛の今ですが、ワークショップやグループミーティングはやはりリアル開催に勝るものはないと改めて感じました。隣接他（多）領域の方のお話をお聞きすることも大きな刺激になります。

令和 8 年 5 月の家族理解ワークショップはゴールデンウィーク中の開催であり、夫婦で参加することとしました。ワークショップ当日、最寄り駅に到着、食事とお茶をし、いざ 2 人で会場に向かおうとすると、配偶者は近くで開催されている寄席の会場に逃走、もとい方向転換！昨年度のワークショップでも直前になって古本街に逃走もとい方向転換したような記憶が……。 「配偶者が同道する場合もあります」というふわっとした予約の仕方だったとはいえ、到着早々お詫びをしつつ、既視感のありすぎる光景に、まずもって我々夫婦相互の家族理解が足りないかと反省しました。

現代社会を「関係性」という 観点から考える

P185～

坂口 伊都

子どもによって性格が違うなあと思って育てていましたが、それぞれ成人してから親へのつきあい方も同じように違いますが、娘は、頻りに連絡を取り合っているし、家にも帰ってきます。息子は、自分が困った時ぐらいですかね連絡してくるの。会いたくなったら、親の方から息子に連絡して両親で息子の勤め先の Bar に飲みに出かけます。私は下戸なので、「甘さ控えめでスッキリとした炭酸のノンアルで」等と適当な注文で作ってくれます。元里子は、聞いて欲しいことがあると連絡をしてくれます。見て見てという感じ。職場の先輩がいろいろなことを教えてくれるようで、ゴールデンウィークに遊びに来た時、いちごの手土産を持ってきてくれました。渡す時、「これ、手土産であっている？」となっていて、たまらなく可愛かったです。

成人してからのほうが、どの子も素直に感情を見せてくれているように感じます。親としての責任が一段落して、この子たちを信じてそれぞれの判断で生きていく姿を見守っていればいいと思っているのが伝わっているのかも知れません。子どもって、成人してからも面白いのですね。

療育手帳の向こう側 P110～

河岸 由里子

【AI 活用】50年以上前に学んだはずの心理統計。今回パイロットスタディーを行ったデータ処理で心理統計を使う必要が出た。公認心理師受験の際も統計は捨てたので、再学習をすることは無かった。今回は仕方なく、心理統計の本を読みなおしたりしたが、ポンコツになりつつある私の脳が十分に働いてはくれない。エクセルでかなりのことができるのは知っていたが、どれをどう使えばよいのか、一から学び直さねばならない。学んだ頃はすべて手計算で、カイ二乗検定くらいしか記憶にない。幸い今回のスタディーについて助言をいただいている大学の先生に教えてもらうことができたが、それでも「？」との戦いが続いている。何とか学術的な文章を書くにしても、データ処理後の分析についても、一応自分で書いてみて、ジェミニやチャッピーに検討してもらいながらとなる。

AI を使えるのは便利だと思う一方、自分で思い悩み、考える力が減るなあと感じる。衰えつつある脳にとってみれば助かるが、若い子たちがなんでも AI を使っているのはいかげなものと心配してしまうのは老婆心か。便利は人を墮落させる。AI は人の脳を墮落させる。便利を享受しながらも、自分で考える力だけは手放さないでほしい。そんなことを考えてしまった。

公認心理師・臨床心理士・北海道

あぁ、相談業務
P72～
先人の知恵から
P146～

中村 正

退職とともに創業した一般社団法人 UNLEARN の組織行動にエネルギーを使う。年度末から新年度にかけて、とくに経理、契約、税務などの仕事が多くなる。税理士や司法書士にお願いしているが、基礎的なことは自分たちでこなさなければならない。アルバイトとはいえ人を雇っているので労災保険などの手続きもしなければならない。当然のことだが、委託業務が多

いので業務完了報告書を提出することになる。そして新年度の業務委託契約を交わす準備も忙しい。また、法人組織の登記に関する事項も整理し、法務局に提出しなければならない。これらは全部、「手続き」なのだ。組織行動は「手続き」としてあることを実感している。また、私的にも「手続き」が浮上してくる。長く事実婚でやってきたが、現政権は夫婦別姓制度に関心はなく、当面、民法は変わりそうにない。同棲しはじめたのが 1989 年だ。38 年目になる。これだけかければ法律改正もあろうだろうという想定で始めたが諦めるか。そろそろ決断、つまりこのままいくのかどうかについてだ。相続制度が夫婦別姓と相性がよくないからだ。決断というのは「結婚」のことである。法律婚を選択するとなるとやはり男性が姓を変えることにしたいと思う。姓を変えるとどんな大変さがあるのか体験する意味はあるだろう。それを書いていこうと思う。これはこれで多くの男性たちがしてこなかったこと、多くの女性たちが体験したことなので、マジョリティ体験として試みしてみることも価値があることだろう。この年になって「結婚」することになるか！「偽装結婚」のようではあるが。

臨床社会学の方法 P21～

中島 弘美

「まだ、仕事を続けていますか？」とたずねられることが最近、増えた。学生時代の同級生のなかには、早期退職をして、生活が大きく変わった人がいる。一方、仕事をしながら、親の介護を担っている人、孫育てに協力をしている人もいる。あるいは、自分自身が大きな病気を乗り越えて、仕事に復帰している人も複数いる。年齢を重ねるなかで、さまざまな経験をする。そして、定年を迎える年齢の前後において、どのような選択をしているのか、いろいろな生活スタイルをみせていただいている気がする。これからは、この先、何ができるのかを考えるステージに入りつつあるなあと、感じている。

カウンセリングのお作法 P34～

黒田 長宏

本文に書かれてるように、YoutubeとTikTok中心にパフォーマンスグループを2人で続けているのが、私のユニークな活動なのですが、Googleやマイクロソフトエッジなどの検索で「マーサとクッピー」で出てきます。くると思います。コンビ名はOKダンサーズです。

あぁ結婚
P158～

脇野 千恵



4 月半ば、「ラオス」に行ってきた。前から一度は行ってみたいと思っていた国だったので、躊躇なく申し込んだ。家族に「ちょっとラオスに行ってくるわ」と伝えると、「ラオスってどこ？何があるの？何しに行くの？」と聞かれた。ラオスは、北は中国、東にベトナム、南にタイ、カンボジア、西はミャンマーに囲まれた国だ。海のない国で、メコン川が流れている。世界遺産もいくつかある。昨年 11 月「愛子さん」が公式訪問した国で、少しは耳にした人がいるかと思うが、たいていの人はどこにあるのかよく知らない。昨年のお阪万博では、ちゃんと参加していた。日本の本州ほどの面積に、約 700 万人以上が暮らす。現在 52 の民族が共生している。何年かに一度は部族の数を調べるらしく、まだ山奥で発見されずに暮らす部族があるとか。ラオスへの直行便はなく、ベトナム・ハノイのノイバイ空港で乗り換えなければならない。成田組の人達とハノイで待ち合わせをするのに、私は一人関空からハノイに向かった。ラオスはアジアでも最貧国と言えるが、後発発展途上国から 2026 年に卒業するらしい。たった 3 日間だったが、今国際情勢が不安定な中、東アジアでも自然

豊かな秘境が多くあるこの国にも、その影響がじわじわと押し寄せていることを実感した旅だった。

こころ日記「ぼちぼち」 P215~

岡崎 正明

昔からちょっと思っていたのだが、最近あらためて思うのは、「事件報道の意義」というやつだ。これがよく分からなくなってきた。京都のこどもの行方不明事件も、広島殺人放火事件も、和歌山のドン・ファンも、一定期間テレビや新聞やネットで大々的に取り扱われ、そして次第に出て来なくなって、別の事件に話移っていく。これって何かの役に立っているのだろうか？いや、なにかの経済を無理くり回す以外に。

戦争のニュースや、少子化の問題、憲法改正議論の話のように、社会やこの世界をどうしていくべきか？どんな課題が私たちの前に今あるのか？そんなことを考える材料になっているかといえば、あまりそんな感じは受けない。むしろ京都の事件では、継父が逮捕されるずいぶん前からネットで根も葉もない様々なフェイクが飛び交い、それを拡散させた人物がインタビューで「あくまで『〇〇〇という情報もある』と、一説を述べただけ。断定はしてない。読む側の問題でしょ。自分は面白がっているだけなんで。事件報道って他人事で、噂するのって無責任で面白いでしょ」みたいな受け答えをされていて。

もちろん国民の知る権利とか、多くの人があることで検証できるという理屈は分かるが、それにしても副作用のデカさが気になってきたこの頃。



(イラスト、chatGPT)

別にマスコミ批判がしたいわけではなくて。私自身も殺人事件の報道を見れば下世話な興味が沸くし、勝手に犯人を推理して妄想を巡らせたり、酒の席でしょうもない話のネタにしてしまう。おそらくすべての

人がそうとは言わないが、多くの人がそんな風に他人の話には無責任であり、暇つぶしの格好の材料なんじゃないかと思う。

みんなでこぞってそんな報道を繰り返し、また次の事件が起きたら飛びつくという、私たち自身の悪い癖をそろそろ自覚し、本当に話し合うべきことを、いろんな立場のいろんな意見を否定せずにとりあえず聞く時間を、作った方がいいんじゃないだろうか？

役場の対人援助論 P96~

千葉 晃央

一人で暮らす80代母と話す。時々、「一緒にカラオケに行こう!」と誘うけれども、フラれる。カラオケには定期的に行っているらしい。確かにグーグルテレビのYOUTUBE 履歴には楽曲が並ぶ。きくと、月一回のペースで、中学校の母の同級生、男1人、女4人の合計5人で、居酒屋での晩御飯とカラオケ2時間という定番コースがあるという。他にも、以前通っていた着物リメイク教室の先生が毎月4日間展示会をしていて、そのサポートボランティアスタッフも常にしている。そのスタッフの方々は母よりも20歳年下。そこに混ざっていて、母が一番年長。展示会の開始時の搬入、最終日は搬出。その後にご飯もあるそう。母の生業としては、煎茶道教室。月2回、数名ではあるがそこでは、自分より年上の生徒も複数いる。そして、趣味でジムに通い、トレーニングを欠かさない。週に3回ペース。先日は先輩会員の男性86歳から黒にんにくを薦められ、もらったそう。時には、ナンパもされるようで「あんたより、年上よ、私をいくつかだと思っているの!？」と追い払うらしい。筋トレ仲間にも20歳年下洋服店従業員がいるそうで、その店に行って服を買ったり、おしゃべりしたり、時にはごはんに行くことも。他にも、亡くなった父の長い友人がのぞきに來てくださり、交流が続く…。母自身の実家は兄が継ぎ、兄夫婦とも年数回は会う…ということで、母は日々忙しい!という。私から見たら約30年後。「痛い」とか言わないで、出かけることを心がけていると話している。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17~

見野 大介

5月に出版した信楽作家市というイベントで、お客様から「ひょっとして、対人援助学マガジンの?」と、お声掛けいただいて驚きました。信楽の地で、対人援助学マガジンの関係者とお会いできるとは。

ハチドリ の器 P4

柳 たかを

マガジン第63~65号に掲載された我が作品「お客」は今回のエピソードでおわります。宮沢賢治の「座敷ぼっこ」を下敷きにしました。タイトルをオリジナルのまま使用すると、「賢治の座敷ぼっこ」と違う印象だよ〜と賢治ファンからお叱りをもらうのが心配で、1話の最初のページで人間世界に遊びに来た霊「客人」マロウドとの解釈を挿入しました。

人間世界を霊が訪れて、人が見えない存在に敬意を持って接すると、霊がその人に富や幸運を引き寄せてくれ報いてくれるかもしれないという思いをこめました。しかし成功があたりまえになり、霊への感謝を忘れると、霊が離れてある日を境に坂道を転げ落ちるように不幸が続く、慌てて神棚に手を合わせてもあとのまつり、、、なんて、私たちは生かされている、将来、精妙なAIロボットが作られたとして、魂も搭載できるかっていうと難しいのでは？

庭の木によく感謝の声をかけ、世話してあげると、美しい花を咲かせてくれるような気がしますが、気のせいかもしれませんね、、、でも私は霊の存在を信じているのです。

お客・渡守のはなし P134

古川 秀明

コロナで中断していたオーブンダイアローグの研修会を、ようやく再開できそうです。最後に開催したのは2020年

ですから、実に6年ぶりになります。

6年も前のこととなると、みなさんの記憶から薄れていても不思議ではありません。しかし、この6年の間に、オープンダイアログを取り巻く環境は大きく変化しました。これから日本でどのように発展していくのか、とても楽しみです。

そう考えると、インドで生まれ、日本で独自の発展を遂げた仏教にもどこか似ています。フィンランドで生まれたオープンダイアログ。その日本でのこれからは、ますます楽しみです。

講演&ライブな日々 P108~

野中 浩一

ながらく『島根の中山間地から Work as Life』というタイトルでやらせていただいています。4月下旬からは JICA 青年海外協力隊の訓練のため、福島県二本松市で2か月半の合宿生活をおくっています。

ということでタイトルはそのままに、今号は「福島の中山間地から Work as Life」をお楽しみください。

福島の中山間地から Work as Life P232~

西川 友理

大阪キリスト教短期大学で保育幼児教育者養成に、またそれ以外の場所でも福祉系対人援助職養成に携わっています。

昨年あたりからおやこ対話のファシリテーターとしていろんなところに顔を出させていただく機会がぼちぼちと出てきました。

そんな活動をしている仲間と、最近、日本国憲法を改めて読む会を開催するようになりました。この国の方向性がなんだかじわじわと見えなくなってきて、色んな不安が押し寄せてきて、このままではマズいかもしれない、と思った有志とはじめまし

た。小さな会ではありますが、皆でじっくり読んでいます。

みなさん、腰を据えて現行日本国憲法を読んだことありますか。なかなか、カッコいいですよ、すごいんですよ、現行日本国憲法。ネットでどこどこに掲載されていますので、みなさんもぜひご覧ください。おすすめです。

福祉系対人援助職養成の 現場から P65~

松岡 園子

休日に花を飾りました。少し丁寧な暮らしをしている気分になります。ところが翌日、冷蔵庫に賞味期限切れのヨーグルトを発見しました。花には目が向くのに、ヨーグルトには目が向かない。感性と生活力は、どうやら別の能力らしいです。

統合失調症を患う母と ともに生きる子ども P197~

寺田 弘志

最近、GOLFDOM 茨木倶楽部というところで、インドアゴルフを楽しんでいます。完全個室で1回80分間、人目を気にせずに練習できます。誰かが入ってくることはない、女性でも安心です。

通常は無人で運営されていますが、何かあればLINEでスタッフさんとやり取りできます。男性用、女性用、子供用のクラブが常備され、家族や友人を誘って行きやすいです。クラブの貸出は無料ですし、同伴者と来ても、追加料金も必要ありません。子どもや孫と一緒にゴルフを楽しめる日が来ることを願っています。

さて、インドアゴルフのもう一つの特徴が、AIを活用したメニューにあります。AIにまつわる話を、本文に書いてみました。

接骨院に心理学を入れて P167~

篠原 ユキオ

発車間際に飛び乗った急行電車は込んでいたが優先座席前に立った。

途切れずに流れていた車内放送の声

は中国語と日本語が入り交じっていたがよく聞くとそれは車両の隅にすわっているオバチャンのスマホからだった。

周囲には迷惑な空気がただよっていたがご本人は全く気にしていない風である。それはどうやら中国語のレッスンのようだ。見ているとボリュームがまた少し大きくなった。

さてどうしたものか。

若い頃からそういう人にはすぐに注意するタチだったのだが最近はそのことからもめ事に発展する事もあるから声をかけるのを迷っていたが次の駅で隣の女性が降りたので取りあえずそこに座った。

思い切って「イヤホン、持ってないの？」と声をかけた。

そんな声がけに怪訝な表情でこちらを向いたオバちゃんの表情がすぐに変わった。帽子をかぶっていたので見えていなかったのだがイヤホンははめていた。

慌ててイヤホンを外し「音が漏れてました？」と言う。スマホにつなぐイヤホンジャックが浮いていたのだ。「なんだか音が聞こえにくいナアと思ってたんですけど、ちゃんとハマってなかったんですね。すみませんでした！」と恥ずかしそうにスイッチを切った。

「そちらが聞こえにくくなった分、周りには鳴り響いてましたよ」と笑いながら言う。「教えて頂きありがとうございます」と恐縮しながら何度も礼を言われた。

周りの乗客たちは相変わらず気付かないふりしているが何とも言えないほっとした空気変わったのを感じた。とりあえずこれがぼくの最新の対人援助エピソードなのでした。



HITOKOMART P208~

団遊

自宅が鎌倉にある。なので、遠足の子ど

もたちや修学旅行中の中高生に頻回に出会う。先日、通勤路である鶴岡八幡宮の境内で、中学 1 年生くらいの男の子が、同行する先生に「なぜぼくたちの学校だけ食べ歩きがダメなのか」と声高に訴えていた。

確かに、鎌倉は食べ歩き散歩の街でもあり(ゴミ箱はひとつもないけれど)、他校の生徒もほぼ 100% 食べ歩いている。ただ、その学校は、食べ歩きを全面禁止しているようで、境内のあちこちの木陰で、座していちご飴を食べる集団がいた。それは、地元民からしても、ちょっと珍しい光景だった。

まだ若いとお見受けする先生は、明らかに返答に窮していた。大した理由なんか、ないからだろう。そこには、回答は正しくなければいけない、という先生の生真面目さを感じられた。理由なんか、何でもいいのに。相手は、多少の理不尽は全身で受け止めるべき年ごろである(それが次につながるから)。「神様が食べ歩きを許さないからだ」とか、何なら、「子どもは知らなくていいんだ」でも全然いいのに。先生はエライんだから。いはやは、「説明責任」という名の責任回避社会においては、先生も大変だな、と思いながら通り過ぎた。

アソブロックの実践から考える 会社の倫理学 P31~

山口 洋典

本文でも触れたとおり、今年度は立命館大学の学外研究制度で、七尾市田鶴浜地区での滞在型のフィールドワークを展開しています。地域の日常に身を置きながら過ごす中、この 4 月から 5 月には NHK 夜ドラ『ラジオスター』を泣き笑いながら鑑賞しました。

輪島市町野町の災害 FM「まちのラジオ」と珠洲市の「海浜あみだ湯」をモチーフにした本作の最終週では、「能登時間」という言葉が印象的に描かれていました。それにより、災害からの復興には一人ひとりに異なる時間の流れがあることを視聴者に向けて丁寧に訴えているという印象を受けました。

研究では復興の過程を記録し分析しますが、その歩みを決めるのは数字や制度

だけではありません。それぞれの「能登時間」に寄り添い、私もまた「能登時間」に浸る、そんな 1 年を過ごしつつ、現地レポートをお届けできれば、と思っています。

PBLの風と土 P161~

鶴野 祐介

「元気です」

(歴代最短の執筆者短信! *編集部注)

うたとかたりの対人援助学 P152~

鶴谷 圭一

前号で「やる!」と宣言した「誰でも通園制度」ですが、あっさり辞退しました。理由の第一はハードルの高さの割に実入りが少ないということです。始めて続くか分からない事業ですが、申請書類が施設を立ち上げるほどの量で、5年継続の縛りがあっても一つの理由です。

現行の一時預かり制度で十分対応できることが分かったので、そちらの制度で行うことにいたしました。(興味のある方は園の HP 参照)

ちなみに誰通は、利用したい保護者が国のシステムに登録して申し込み、その情報を地方自治体が受けて、受け入れ可能な施設を斡旋するというシステムです。

保育業界では、「処遇改善加算」という給与改善のお陰で、保育者の所得は確実に上がってきていますが、この制度が継ぎ足し継ぎ足しで変更されてきたために、申請や実績報告は毎年変わって難解になって、とても憂鬱な作業になっています。「誰通」もそうなりかねないので、様子見としました。いろんな問題点が解消されて整理されればそのタイミングで参入と思っています。

幼稚園の現場から P54~

竹中 尚文

5月は誕生日だ。警察から手紙が来た。自動車運転免許の更新には高齢者講習が必要であるという。自分が高齢者であるという自覚はあまりないが、これから何十

年も生きるだろうとは思わない。死も遠くないし、この健康もいつまで続くか分からない。それは生まれたときからずっとそうだった。◆先輩たちの多くは、「この先、病気になったりしないで、楽にお迎えが来れば」という声をよく聞く。将来に対して、ローンを組んで高額なものを購入する話は聞かない。将来について、どんな希望を持つのだろう。楽に死ぬことだけが将来の展望であれば、ホームレスの人たちと変わらない。生きることの意味も、死ぬことの意味も考えずに終活だと騒ぎ立てる高齢者に愚かしさを見る。

路上生活者の個人史 P85~

山下 桂永子

最近スマホを買い替えました。前の機種も全然使いこなせていなかったように思いますが、今回の機種もきつと使いこなせぬまま数年後にお別れになりそうです。そういえば昨年夏に 30 万キロ走った車を新しく買い替え、新しい相棒もいろいろと最新の技術が詰め込まれているようなのですが、まだ全く使いこなせている気がしません。新しいシステムを自分に導入するのは本当に億劫に感じてしまいます。そんな中、やっと重い腰をあげて最近 AI を使っています。旅行のスケジュールを組んでくれたり、調べものをした上に、関連することを提案してくれたり結構便利なのですが、ちょいちょい嘘も入ってくるので、一次情報の確認が却って手間に感じることもあります。今後、仲良くしていけるか不安もありつつおつきあいを始めている状況です。



(イラスト、chatGPT)

というわけで、今回の対人援助マガジンの原稿を書くにあたり、最後に校正をお願い

いしてみました。読んで頂き、読みやすくなっていたら幸いです。

心理コーディネーターに
なるために
P142～

迫 共

広島から岡山の倉敷へ移動しました。隣の県ですが文化が違うなあと思っています。広島では不思議な四角四面の対応をされることが多かったのですが、岡山は「ぬい関西」という印象です。

勤務校は1年任期で、公募になかった独自のキャリア形成科目を多く配置され、何を教える人かますます分からなくなっています。保育→福祉→キャリア？

18歳人口が減少し、大学の募集停止が散見される状況なので、大学教員もどんどん流動化していくのでしょうか。様々な大学の採用面接を受けましたが、どこもそれなりに苦労しているんだなあと思います。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P190～

大谷 多加志

大学で働くようになって6年目、昨年度からは学科の中で募集関係の業務を担当することになり、オープンキャンパスの進行や、高校への出張講義の調整などを行う機会が増えました。大学本部からは結構な無茶ぶりを喰らうこともあり、『再来週の〇時から、…』という内容で1時間ほど講義してほしいそうです『月末に高校生さんが大学に来るので、学科の説明や何か心理学っぽい体験を用意しておいてください。何人来られるかは直前にしかわかりません』みたいなリクエストが日常的に飛んできます。必然的に、何かしら対応できる引き出しを増やしていくしかなく、直近では手先がいまいち不器用なのに手品の練習に取り組むことになりました。慣れていないことや苦手なことに挑戦する機会を得たと、面白がってやっていくしかないかなと思っています。

発達検査と対人援助学
P102～

荒木 晃子

毎年5月に開催される不妊関連の学会で、今年は自分で口頭発表の機会を得た。最近では、講演やパネリストの登壇依頼は時折あるが、クリニックの心理士として学会発表するのは何年振りだったろう。昨年は同学会で ALLY 看護師の発表を後押しする黒子に徹し、3年に渡り院内で取り組んできた LGBTQ 当事者対応のための、基礎知識の習得、具体的な対応スキル、院内整備(問診票の作成、予診票の改訂ほか)など、粛々と進めてきた院内整備を報告した。ありがたいも奨励賞となるものを受賞し、院長共々スタッフ皆で喜びを分かち合えたと思う。

さて、今年の発表内容はというと、トランスジェンダー女性を視野に入れた、男性不妊患者のための院内整備に関する報告であった。果たして、制限時間を意識した早口での口頭発表が終わると・会場は一瞬、静まり返ったような静寂に包まれた。座席が足りず立ち見の参会者で三方の壁が見えないほどの会場が、である。

静寂を破り、会場からの質問がないことを確認した座長がひとこと。「あまりにも内容が広くて・ちなみにその料金は？」・・・心理士が回答できること内容ではなかったもので、即、会場にいた院長に回答をお願いした。

その時、筆者が心の中でつぶやいた回答はというと・・・「トランスジェンダーであれ、シスジェンダー男性であれ、医療行為にかかる料金は同じです」。

不妊カウンセリング領域に一石は投げたものの、乗り越える壁は高く、まだ先は遠いことを実感した学会であった。

生殖医療と家族援助
P83～

水野 スウ

マガジン、2回続けてお休みしましたが、連載58話を久しぶりにお届けします。今号は、半世紀を超えての特別な友人、そして私の7冊の本に編集者として深く関わってくれた松田悠八さんのことを、ゆっくり振り返りつつ文章にしました。

松田さんは、1980年代に出版されてロングベストセラーとなった『パパラギ』という

本の編集者さんでした。松田さんはその本を、今度は自分の言葉でまったく新しい絵本にしようと情熱を傾けて取り組んでいたのだけれど、その半ばで病気が見つかり、昨秋、旅立たれました。その絵本は果たして生まれることができたのか。続きはどうかマガジンの「きもちは、言葉をさがしている」で読んでくださいね。



松田さんとの関わりを見つめて書くことは、図らずも、私がこれまで何を伝えたくて、どう伝えてきたか、いま何をどう伝えたいと思っているのか、といった私自身の表現史を見つめることでもありました。

近況報告を一つ。毎週の「紅茶の時間」内で1時間だけの「たいわけんぼう cafe」を始めることにしました。改憲に前のめりな高市さんの政治に、若い人たちが今とても不安を感じてる。それだけに、いま憲法のこと知りたいけど、一体どこから始めていいかわからない。そんな人たちと、憲法を真ん中に対話しながら、憲法とお近づきになっていく、自分ごとにしていく、そんな時間をつくっていきたいと思います。

それってちょうど10年前、紅茶内で1時間だけの「草かふえ」を始めた時とおんなじ気持ち。あの時は、自民党改憲「草」案を知ろう、だったから、草かふえ。たった1時間、されど1時間、回を重ねたことでいろんな種が蒔かれていったことを確信してるので、今回もそうあれかし。勉強会でも学習会でもない、たいわけんぼう cafe へ、ようこそ。

きもちは言葉をさがしている
P76～

原田 希

4月5月は牛の分娩がなく、少しゆっくりさ

せてもらいました。春って分娩に良い季節じゃないの？と思われるかもしれません。牛さんの場合、春に産ませようと思うと、7月8月に人工授精をしないとイケないのですが、猛暑でとても無理！牛さんもしんどい。ということで、春は我々もリフレッシュ期間としています。勉強会をやったり、コンサートや美術館にも行きましたが、結局、牛舎に居て、今のうちに牛さんの爪のメンテナンスをやっとう。とか、暑熱対策用のペンキを塗ってもらおう。とか、先々を考えて計画、実行、結果が出たら分析。そんな作業が一番面白い。と思っている自分を見つけたリフレッシュ期間でした。

原田牧場Note P200～

高木 久美子

友人マギーが亡くなりました。

マギーは意思疎通支援装置「ヨミトリ君」開発者の岡田さんを私に紹介してくれた、正にヨミトリ君の生みの親の親という存在。病気で幼少の頃に視力を失い、その後重度の聴覚障害となりながら、補聴器と白杖を携え、市の視覚障害理解講座の講師として、小中学校訪問などで活躍しました。子ども達に大人気でした。

一緒にやっていた音楽バンドでは、マギーはボーカルを担当。しっとりとしたバラードや留学経験を生かした英語の歌は、聴く人の心を引き付けました。

あちこち一緒に慰問演奏に行っただなあ。イベントで「ヨミトリ君音頭」を歌ってくれてありがとう。

緩和ケア病棟に入院中に面会に行きました。

ささやくような小さな声でしたが、「マギーライブは楽しかったね」とにっこり笑って、「もう一度歌いたい」と言ったのが最後となりました。

ありがとう、マギー。

これからもヨミトリ君の活躍を見守ってね。

<https://www.goisshoshimasho.com/>

ヨミトリとヨミトリ君でご一緒しまし
よ！
P240～

高名 祐美

令和8年度。私のスクールソーシャルワーカー（以後SSWとする）活動は4年目となった。小・中学校からの支援依頼は年々増えている。今年もすでに12件担当することになって、日々こどもと関わっている。

研修会にもできるだけ参加し、学びを深めながら教育現場でのソーシャルワーク実践に勤めている。そのことをこのマガジンで紹介したいと「SSWの仕事」を書きはじめた。しかしながらあまり筆がすすまない。子どもたちの抱える課題を解決して、支援の終結をむかえることができていないからかもしれない。

先日、小学校4年生から不登校となり、SSWとして初めて関わったMちゃん親子と会った。この4月から中学1年生となり、なんと現在登校できるようになっている。その変化をアセスメントしたいと、会う約束をした。

Mちゃんは硬い表情だったが、それでもポツポツ話しをしてくれた。「勉強はしんどいから、そんな話はしたくない」と言われ、自分の面接技術がおそまつだと感じる。日々葛藤しているようだが、「今は不登校じゃない」とはっきり私に伝えてくれた。大好きな甘いスイーツを食べながら。そして。「今日、ほんとはちょっと調子がわるかったけど、高名さんに会おうと思ってきました」と。その言葉をかみしめつつ、Mちゃんの頑張りこれからサポートできたらと思う。

(しばらく原稿「SSWの仕事」はお休みさせていただきます)

スクールソーシャルワーカーの仕事 休載